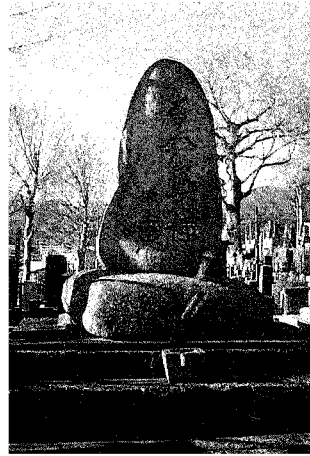


都留の野ぼとけ (十二)

六字名号塔 鈴木茂治

前回までに紹介した野ぼとけは、だいたいひとつの仏さまを尊像と文字碑の二種類で表現しているものが大部分でしたが、今回は文字碑だけの野ぼとけを紹介いたします。それは市内の路傍やお寺の門前などにある名号塔(念仏塔)といわれるものです。このうち、「南無阿彌陀仏」の六字が書かれているのを「六字名号塔」、「南無妙法蓮華経」と七字書いてあるものを「七字名号塔」と呼んでいます。



下谷横町、西涼寺、徳本名号塔

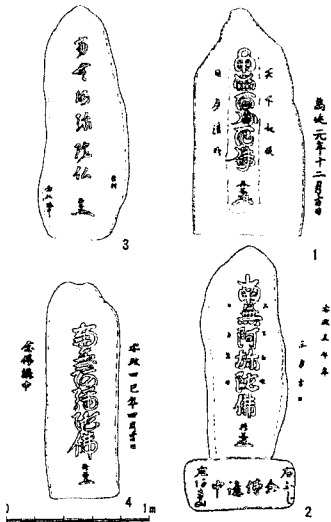
も、この名号塔の前で名号(念仏、題目)を誦することによって極楽往生(死んで極楽へ行くこと)ができるという信心のための石塔です。

市内に多い六字名号塔のうちには、その名号を書いた人の署名(サイン)のわかつているものが二種類あります。一つは、写真の横町西涼寺にある徳本上人の書かれたものです。

六字名号塔は市内には九基、七字名号塔は二基現存しています。六字と七字の違いは、お念仏(浄土宗、浄土真宗、時宗)信者と、お題目(日蓮宗)信者の唱えている經典のことばの違いです。どちら

徳本名号塔

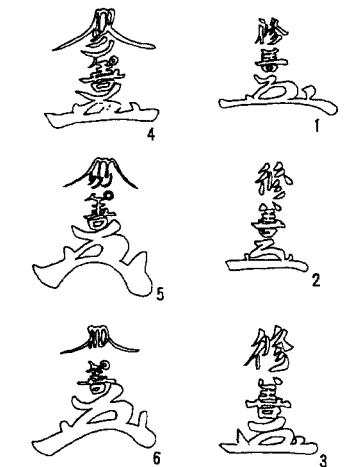
徳本さんは紀伊国(和歌山県)で寛政元年(一七八九)生まれの念仏僧で、二十七歳で仏門に入り、徳本念仏講というものを組織し、江戸



第1図 修善銘の名号塔

徳本さんは紀伊国(和歌山県)で寛政元年(一七八九)生まれの念仏僧で、二十七歳で仏門に入り、徳本念仏講というものを組織し、江戸

(東京)を中心に、幕末の不安な世相を背景に近郊農村に熱狂的な信者を集めた木食僧の一人です。都留郡内へは文政年間(一八一八〜一八三〇)に布教に訪れたらしく、西涼寺の塔には「文政元年(一八一八)秋」とあり、もう一基の法能湯の沢の塔には「文政三年(一八二〇)五月」と銘があります。徳本さんの字は特徴があつて、筆の終りのところがはねあがつていてヒゲのようなので「ヒゲ字」といわれています。西涼寺のヒゲ字塔は高さ二メートルという巨大なもので、六字名号塔では市内最大です。(上写真)



第2図 修善銘と花押

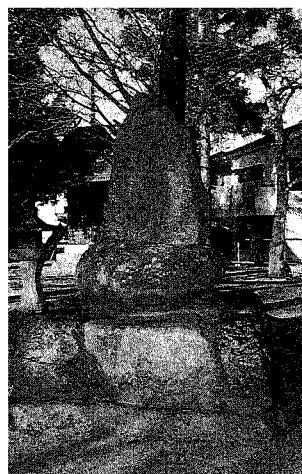
- 1: 沢井の名号塔
- 2: 無辺寺の名号塔
- 3: 宮川上橋の名号塔
- 4: 親不知の名号塔
- 5: 熊野権現社の名号塔
- 6: 八十八大師の供養塔

もう一種の署名入り名号塔は、修善和尚の書かれたものです。この修善塔は、市内と近隣の太月市、西桂町などから現在六基ほど発見されています。

修善名号塔

修善和尚はその生い立ちなど不明ですが、三ッ峠を神鈴峰と名づけて念仏信仰の山とした神鈴峰上人の一人です。三ッ峠の信仰遺跡を調査研究している市職員奈良さんの論集によれば、神鈴峰中興開山は善恵空胎上人という方で、この空胎が郡内に入ったのは文政六

年(一八二三)のことで、谷村で布教活動に勤めたとあります。その空胎上人を一世とすれば、四世にあたるのがこの修善大道浄阿和尚です。修善は三ッ峠の八十八大師供養塔の造立や、親不知の岩面に名号を刻むなど、山内の整備に努めると共に、「修善」銘の名号塔の造立に関わるなど、神鈴峰の隆盛に大いに寄与しました。修善の来歴については不明な点が多いが、空胎に師事し、念仏行者としての修業を重ねたものと思われる。修善名号塔の特徴は第1図(修善銘の名号塔)に見られるように、徳本塔のヒゲ字とは異なり、丸を強く意識した独特の書体で銘も三ッ峠状に三峰の形に崩された「修」と、小さな丸を取込んだ「善」によく現れている(第2図・修善銘と花押)。発見された修善塔六基とは(1)太月市大月町無辺寺山門前(安政四、一八五七年建立)(2)太月市大月町



古川渡中島熊野権現社、修善名号塔

またこれらの内、宮川上橋・沢井・無辺寺に立つ名号塔には「念仏講中」と刻んであり、神鈴峰の上人と里の念仏講との結びつきを物語るものとして、興味深いものがあります。

これらの名号塔が造立された時期は、安政三年から文久二年の七年間という偏りが認められ、この時期は空胎晩年に当り、修善が最も活躍した時期と推察されています。

で(下写真)、富士北麓地域ではこのような石塔を「出額」と呼ぶそうです。(5)西桂町下暮地八十八大師(文久二、一八六二年)(6)西桂町下暮地三ッ峠親不知(安政六、一八五九年)のものなどです。

沢井の車道終点(安政三、一八五六年)(3)都留市井倉宮川上橋東畔(安政五、一八五七年)の台石には(右ふじ、左阿基山)と刻まれてあり、富士道の道標を兼ねていたことが分かります。(4)都留市古川渡中島熊野権現社(万延元・一八六〇年)の名号塔は上部が前面から湾曲したもので(下写真)、富士北麓地域ではこのような石塔を「出額」と呼ぶそうです。(5)西桂町下暮地八十八大師(文久二、一八六二年)(6)西桂町下暮地三ッ峠親不知(安政六、一八五九年)のものなどです。